

## 母性看護学実習前後における女子大学生の 親準備性の変化に関する実態調査

贄 育子, 中川名帆子

### 抄 録

母性看護学実習における女子学生の親準備性の変化を知るため、A大学看護学科3年次女子学生92名を対象に、母性看護学実習前後の「乳幼児への好意感情」、「育児への積極性」、「育児機会」、「育児への自信」、「親になるイメージ」を調査し、90名の有効回答を分析した。その結果、「乳幼児への好意感情」、「育児への積極性」、「育児への自信」、「親になるイメージ」において、実習前より実習後の得点が高く、統計的有意差がみられた。得点の上昇から、学生は短い実習期間の中で妊産褥婦や新生児との関わりを通して母性看護を学ぶと同時に、乳幼児に対する好意感情が高まり、積極的に新生児と関わることができていると推察される。そして、親になるイメージをもつことや、育児に対する自信の獲得によって、自らの親準備性を育てているといえる。以上のことから、母性看護学実習における、学生の親になる準備への寄与が示唆された。

キーワード：親準備性、母性看護学実習、女子大学生

### I. 緒言

わが国の合計特殊出生率は、平成17年に1.26と過去最低を記録した。その後は横ばいもしくは微増傾向で、平成25年は1.42と長期的な少子化の傾向が継続している<sup>1)</sup>。その対策として厚生労働省では、子どもと子育てを応援する社会の実現に向けて、総合的な子育て支援を推進しており、「次世代育成支援対策推進法（平成15年法律第120号）第7条1項の規定に基づく行動計画策定指針」には、次代の親の育成として、「乳幼児と触れ合う機会を広げる」ことが明示されている<sup>2)</sup>。

少子化・核家族化などにより、育児行動の観察や体験など養育や育児について学習する機会を得ることがないまま親になる傾向が強くなり、親役割や行動に問題が生じている現状を鑑みて、青年期の発達段階における親性育成の必要性が指摘され<sup>3)</sup>て久しい。これまで思春期における保健・福祉体験学習事業<sup>4)</sup>、医学系大学生を対象とした「ふれあい育児体験」<sup>5)</sup>や看護学生の育児支援ボランティア<sup>6)</sup>等、様々な子どもとの接触体験が実施され、子どもへの情意的・感情的領域を高めることが報告されている<sup>7) 8) 9)</sup>。

親性は、女性と男性に共通する、自己を愛し、尊重しながら、他者（子ども）に対しても慈しみやいたわりをもつ性質で、ライフステージとともに発達していくものであり、妊娠・出産・育児期では、子どもに対して保護や育成という能力で発揮される<sup>10)</sup>。また、親準備性は子どもに対する親としての役割を遂行するための資質、つまり「養育役割」としてとらえられ<sup>11)</sup>、「情緒的、態度的、知的に親としての役割を果たすために十分なレディネス」<sup>12)</sup>、「心理的、行動的、身体的に育児行動を行うために必要な資質を形成していく、あるいは形成された状態」<sup>13)</sup>と定義されている。親準備性の形成には、妊娠以前の段階である乳幼児期から青年期までの経験が関わっており、誕生後、現実に親となるまでの経験と学習が重要な意味を持っている<sup>14)</sup>といわれている。

看護師国家試験受験資格を取得する看護系大学の教育課程においては、90時間の母性看護学実習が必修科目とされている。母性看護学は看護の対象である人間を母性の側面から捉え、リプロダクションの営みに焦点をあて看護を追及する学問である。リプロダクションの営みは、妊娠・分娩・産褥期とそれら機能に限定されたものではなく、生涯にわたる、少なくとも思春期から更年期に至るまでのスパンで捉えるものであるが、母性看護学実習の対象は、マタニティサイクルにある健康な母子とその家族である<sup>15)</sup>。母性看護学実習については、母性親の深まりや新生児に対する愛着の芽生え、興味・関心を

Ikuko Nie, Nahoko Nakagawa  
岐阜聖徳学園大学

もつことができた<sup>16)</sup> という実習による学生の意識の変化や実習経験により児への感情がpositiveな方向に変化する<sup>17)</sup> と報告されている。また、母性看護学実習での分娩見学を通して学生が将来の自分の姿を思い描いているという報告もある<sup>18)</sup>。

A大学では「女性の特性とヘルスケアニーズを理解し、リプロダクティブ・ヘルスの視点から必要な援助ができる基礎的能力を養う。また、特にマタニティサイクルにある対象および家族へ、適切な援助ができるための基本的な実践能力を養う。」ことを目的として2週間の産科病棟実習を行っている。

看護学生にとって、周産期の母子とのかかわりという貴重な経験となる母性看護学実習によって、学生の親準備性が生まれ、次代の親の育成となることが予測される。そこで本研究は、母性看護学実習前後の親準備性の比較検討を行い、母性看護学実習における親準備性の変化を知ることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 調査期間

平成25年8月から平成26年3月。

### 2. 調査対象

A大学看護学科3年次女子学生92名とした。青年期は、結婚や家庭生活に対して積極的態を発達させ、その準備をする時期であり、この時期の親性育成の必要性が指摘されていることから、青年期にあたる大学生を対象とした。また、親性は男女ともに共通する資質であるが、出産という男性とは異なる役割によって、男性より強い子どもとの親密性をもつ女性のみを対象とした。

### 3. 調査方法

無記名自記式調査法を用い、実習前後の比較が出来るよう実習前・実習後の各調査用紙には共通の番号を付し、回収用封筒の色分けにより実習前後の区別をした。実習前の調査用紙とともに、厳封した実習後記入用調査用紙、回収用封筒、同意書及び同意撤回書を配布用封筒に封入した。

実習前のオリエンテーションにおいて、依頼文書を用いて口頭で説明し、同意を得られた学生に上記配布用封筒を手渡した。回答後の調査用紙は回収用封筒に厳封後、施錠可能なレポート提出用BOXへの投函とした。

各回答者が実習前と実習後に同じ番号の調査用紙による回答が可能となるよう以下の手順で実施した。

- 1) 実習後記入用調査用紙は実習前記入用調査用紙と共通の番号が記入してあるため、厳封とした。
- 2) 実習前の回答時に前記1)の封筒表面の回答者氏名欄への記名を依頼した。
- 3) 実習最終日のまとめの後、前記2)の封筒を記名の学生に手渡し、回答後は同封の回収用封筒に厳封の上、実習前同様にレポート提出用BOXに投函とした。

なお、提出期限は1週間以内としたが、成績評価への影響を避けるため、レポート提出用BOXからの調査用紙回収は、全学生の成績評価提出後とした。

### 4. 調査内容

信頼性、妥当性（併存妥当性、構成概念妥当性）が確認されている親性準備性尺度（改訂版母性準備性尺度<sup>19)</sup>）を使用し、「乳幼児への好意感情」9項目、「育児への積極性」13項目を測定した。本尺度は、青年期後期（大学生にあたる）の子どもを持たない女子における母性の準備性に関する意識を測定する母性準備性尺度<sup>20)</sup>を青年期男女に使用するにあたり、開発者の承諾のもと名称を変更し、「育児への積極性」の2項目が削除されたものである。さらに、親準備教育に関する質問項目<sup>21) 22)</sup>についても調査した。この質問項目は、「育児機会」に関する2項目、「育児への自信」に関する4項目、「親になるイメージ」に関する2項目の8項目から構成されている。親性準備性尺度、親準備教育に関する質問項目ともに、「あてはまる」5点から「あてはまらない」1点の5点評価となっている。

### 5. 分析方法

SPSS Statistics Ver.23.0を使用し、実習前後の親性準備性尺度と親準備教育に関する質問項目の各得点について対応のあるt検定による分析を行った。なお、逆転項目については、点数を逆転した。

有効回答を得た20-21歳で出産や育児経験のない90名を分析対象とした。

### 6. 倫理的配慮

対象者に研究目的、意義、内容（方法）、自由参加と中断の権利、参加・不参加いずれの場合においても評価等において一切の不利益を被らないこと、プライバシー保護の権利が保証されること等を明記した依頼文書を提示し、同意書を用いて同意を得た。本研究は研究者所属機関の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番

号：第1308号).

## 7. A大学における母性看護学実習

### 1) 母性看護学実習の内容

2～6名の学生を1グループとして、母子を受け持ち、看護過程の展開を行い、看護を実践するという方法で2週間の病棟実習を行った。複数の医療施設での実習展開となっているため、学生が経験する項目には差異がある。特に、分娩の立ち会いについては、その差が顕著であった。しかし、授乳見学やバイタルサインの測定・おむつ交換等の新生児のケア、育児技術獲得に対するケアは全員が経験している。なお、学生が実施する全てのケアは指導者または教員の監督下で行った。

### 2) 指導体制

グループごとに1名の教員が担当し、実習指導を行った。母子へのケアに対する日々の振り返りとして実習終了前30分間を使用し、カンファレンスを行った。その際担当教員は、看護技術の振り返りと同時に母子に対する学生の思いについても確認した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 親性準備性尺度の結果

#### 1) 乳幼児への好意感情

乳幼児への好意感情の下位尺度9項目すべてにおいて実習前より実習後の得点が高かった。そのうち、「赤ちゃんのことにについて知りたいと思います

表1 親性準備性尺度（乳幼児への好意感情） n=90

	平均値（標準偏差）		t値
	実習前	実習後	
あなたは赤ちゃんが好きですか	4.57 (.750)	4.66 (.621)	-1.339
赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか	4.77 (.562)	4.81 (.517)	-.684
赤ちゃんのことにについて知りたいと思いますか	4.30 (.771)	4.47 (.810)	-2.099*
赤ちゃんに関心がありますか	4.32 (.791)	4.50 (.824)	-2.368*
赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか	4.29 (.939)	4.43 (.875)	-1.883
赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりしますか	4.49 (.738)	4.60 (.632)	-1.518
赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか	4.44 (.925)	4.69 (.697)	-2.765**
赤ちゃんの世話をすることが好きですか	4.07 (1.036)	4.34 (.926)	-3.014**
赤ちゃんに興味がありますか	4.38 (.773)	4.48 (.877)	-1.290
乳幼児への好意感情（合計）	39.62 (6.131)	40.99 (5.880)	-2.789**

\*\*p<.01 \*p<.05

表2 親性準備性尺度（育児への積極性） n=90

	平均値（標準偏差）		t値
	実習前	実習後	
育児は素晴らしい仕事だと思う	4.53 (.657)	4.63 (.661)	-1.450
育児をしている間に、世の中の動きから取り残されてしまうと思う	2.93 (.992)	3.10 (1.061)	-1.459
育児によって自分自身もまた成長できると思う	4.51 (.604)	4.68 (.537)	-2.344*
育児は楽しいと思う	3.59 (.860)	3.86 (.955)	-3.041**
育児をしていると、子どものことばかりで視野が狭くなると思う	2.87 (.950)	2.97 (1.086)	-.943
育児は人の生きがいだと思う	3.48 (.927)	3.67 (.960)	-2.186*
育児はつらい仕事だと思う	2.55 (1.011)	2.72 (1.076)	-1.663
育児をしていると、自分の好きなことができないと思う	2.20 (.824)	2.43 (.937)	-2.333*
将来育児をするのが楽しみだ	3.92 (.963)	4.12 (.992)	-2.628*
育児をしている親は輝いて見える	3.78 (.909)	4.27 (.946)	-5.003***
育児をしている親は疲れてみずばらしく見える	3.54 (1.007)	4.04 (1.005)	-4.988***
自分も育児をやってみたいと思う	4.04 (.935)	4.21 (.954)	-2.021*
自分は育児をすることには自信がない	2.41 (1.059)	2.77 (1.112)	-3.271**
育児への積極性（合計）	44.30 (6.415)	47.43 (7.812)	-5.581***

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

か],「赤ちゃんに関心がありますか」,「赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか」,「赤ちゃんの世話をすることが好きですか」の4項目において,統計的有意差がみられた。下位尺度9項目の合計点においても実習前より実習後の方が有意に高かった(表1)。

## 2) 育児への積極性

育児への積極性の下位尺度13項目すべてにおいて実習前より実習後の得点が高かった。そのうち,「育児によって自分自身もまた成長できると思う」,「育児は楽しいと思う」,「育児は人の生きがいだと思う」,「育児をしていると,自分の好きなことができなと思う」,「将来育児をするのが楽しみだ」,「育児をしている親は輝いて見える」,「育児をしている親は疲れてみすばらしく見える」,「自分も育児をやってみたいと思う」,「自分は育児をすることには自信がない」の9項目において,統計的有意差がみられた。下位尺度13項目の合計点においても実習前より実習後の方が有意に高かった(表2)。

## 2. 親準備教育の結果

### 1) 育児機会

質問項目の「普段の生活の中で,乳幼児と遊ぶ機会がある」では,実習前に比べて実習後の得点が低くなっていたが,統計的有意差はなかった。質問項目2項目の合計点においては,実習後の得点の上昇はみられたが,統計的有意差はなかった(表3)。

### 2) 育児への自信

質問項目の「自分ひとりで,しばらくの間,乳幼児の世話をする自信がある」,「しばらくの間,乳幼児と楽しく遊ぶ自信がある」,「子どもが悪いことをした時,上手に叱ったり,注意したりする自信がある」,「子どもがどんな気持ちでいるのか,理解できると思う」の4項目すべてにおいて実習前より実習後の得点が有意に高かった。4項目の合計点においても同様であった(表4)。

### 3) 親になるイメージ

質問項目の「将来,自分が親になる姿をある程度想像することができる」,「子どものいる生活がある程度明確にイメージすることができる」とともに実習

表3 親準備教育(育児機会)

n=90

	平均値(標準偏差)		t値
	実習前	実習後	
普段の生活の中で,子どもをあやしたり,オムツ替えたりするなど,乳幼児の世話をする機会がある	1.72 (1.227)	1.83 (1.265)	-1.367
普段の生活の中で,乳幼児と遊ぶ機会がある	1.91 (1.355)	1.88 (1.262)	.365
育児機会(合計)	3.63 (2.442)	3.71 (2.437)	-.513

\*\*p<.01 \*p<.05

表4 親準備教育(育児への自信)

n=90

	平均値(標準偏差)		t値
	実習前	実習後	
自分ひとりで,しばらくの間,乳幼児の世話をする自信がある	2.16 (1.226)	2.89 (1.240)	-6.784***
しばらくの間,乳幼児と楽しく遊ぶ自信がある	3.02 (1.289)	3.42 (1.190)	-3.517**
子どもが悪いことをした時,上手に叱ったり,注意したりする自信がある	2.61 (1.154)	2.97 (1.123)	-3.902***
子どもがどんな気持ちでいるのか,理解できると思う	2.64 (.865)	2.88 (.934)	-2.839**
育児への自信(合計)	10.40 (3.720)	12.12 (3.818)	-6.009***

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01

表5 親準備教育(親になるイメージ)

n=90

	平均値(標準偏差)		t値
	実習前	実習後	
将来,自分が親になる姿をある程度想像することができる	2.80 (1.104)	3.16 (1.090)	-3.380**
子どものいる生活がある程度明確にイメージすることができる	2.76 (1.105)	3.13 (1.144)	-3.664***
親になるイメージ(合計)	5.56 (2.105)	6.29 (2.174)	-3.767***

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01

前より実習後の得点が有意に高かった。2項目の合計点においても同様であった(表5)。

#### IV. 考察

##### 1. 育児への積極性と自信

「赤ちゃん」に対する可愛さや好きという漠然とした感情が、実習を通して学修した新生児の生理的変化の理解や抱いたり授乳したりと直接触れたことによって、新生児に対する関心が増し、もっと知りたい、もっと抱いたり世話をしたいと変化し、好意感情が高まったと考えられる。そして、育児は楽しい、育児は人の生きがいが、育児によって自分自身も成長できる、育児をしている親は輝いて見えると育児に対するポジティブな印象が強くなり、育児をするのが楽しみ、育児をやってみたいと育児への積極性が高まったと考えられる。その一方で、看護学生は出産直後の母親の疲労状態を観察し、それを考慮したケアを実践する必要があることから、「育児をしている親は疲れてみすぼらしく見える」という項目の点数が上昇したと思われる。また、頻回の授乳や母乳育児、夜間の不眠等の母親の思いや母親の育児に対する不安の傾聴から育児の困難さに直面したことによって、親準備性尺度の「自分は育児をすることには自信がない」という項目の得点上昇につながったと推察される。母性看護学実習において学生が関わる対象は、正常経過にある周産期の母子であるため、保健指導が中心となる。しかし、他の領域では健康課題をもつ対象のケアを中心に学習していることから、産褥期の女性や新生児の生理的変化に対するウェルネスの視点がもちにくく<sup>23)</sup>、看護介入を必要とする問題点を検索する傾向がある<sup>24)</sup>。そのため、母親の育児や不安に対するケアの困難感に加えて、学生が直接的・間接的に母親の育児の困難さや不安を見聞きしたこと、さらに学生自身の育児技術の困難さも学生の育児に対する自信の低下を助長したと考えられる。先行研究においても、実際に子どもに触れ、子育ての現場を知ることにより、現実の困難さを意識せざるを得ないことから、育児を楽しみと思う反面、そのつらさや大変さも体験してしまうことにより、育児への積極性が低下することが示唆されている<sup>22)</sup>。

しかし、親準備教育の「育児への自信」と「親になるイメージ」の得点は全て上昇しており、母性看護学実習が育児への自信や親になるイメージに有意義であることが明らかとなった。

##### 2. 母性看護学実習と親準備性の育成

親準備性には、①子どもに関するもの(子どものイメージ、子どもへの関心・感情)、②子育てに関するもの(子育てへの感情、子育てに関する認識、子どもの発達に関する認識、養育方法に対する意識)、③親になることに関するもの(親になることに対する感情・意識)がある<sup>25)</sup>といわれている。母性看護学実習における、新生児との関わりによって①の子どもに関するもの、新生児に関する学習、オムツ交換や授乳、沐浴等の育児技術の修得によって②の子育てに関するもの、授乳見学や子どもを愛おしむ母親の眼差しや母親に護られ安らかに眠る新生児の観察等、母子相互作用や母親の心理等を学習することによって③の親になることに関するものが涵養されたと考えられる。また、親準備性に関して、親として子どもに接するときはもちろん、他の人びとに対しても上手にやさしく接する心の準備態勢が、一つのポイントになる<sup>14)</sup>といわれている。人に対してやさしく接する心は看護師としても必要な要素であることから、学生は看護師として必要な学習と同時に親準備性も養っているといえる。

2週間という短い実習期間の中で、学生は、妊産褥婦や新生児との関わりを通して母性看護を学ぶと同時に、乳幼児に対する好意感情が高まり、積極的に新生児と関わることはできているのではないかと推察される。そして、育児に対する自信を獲得し、親になるイメージをもつことによって、自らの親準備性を育んでいるといえる。親になるために最も重要なことは「子どもが好き」という感情を育てることである<sup>26)</sup>といわれており、乳幼児への好意感情を高める母性看護学実習は、学生の親になる準備に対しても寄与していることが示唆された。青年期は、個人としての人格の完成を図るとともに、社会的に見ておとなとして期待されている役割を十分に果たすための最終的な準備段階にあたる<sup>27)</sup>。親となることや結婚・妊娠・出産について興味・関心を抱きやすい時期であることから、親性を獲得するための働きかけを行う重要な時期とされている<sup>28)</sup>。したがって、この時期に、分娩に立ち会ったり出産直後の母親がわが子を心から愛おしく思い新生児と接する場面に関わることは学生自身の出生や乳幼児期をイメージし易く、母親にとっての大切な存在としての自分というポジティブな印象に転換し易いといえる。

親性が未形成であると育児不安傾向が強<sup>29)</sup>、子どもの特性を知らず受容する姿勢をもたない若い世代の増加が子育て困難現象の一因とされている<sup>3)</sup>。結婚前から親

性を涵養することは子育て支援の観点からの課題でもあり、親になる教育すなわち育てられる者から育てる者への転換を助ける教育が必要といえる。臨地実習指導において、母性看護学の学修だけでなく、学生の親準備性を形成するための関わりも含めた実習指導のあり方を考える契機となった。他の実習指導同様に携わる教員は、実習初期に学生が感じ易い戸惑いや緊張・不安を理解し、学生が積極的に母子との関わりがもてるように、調整する役割がある。さらに母性看護学実習では、母子との関わりが増すにつれ、対象者に十分なケアが提供できない困難感から育児に対する否定的な感情が生じやすい。教員が個々の学生と十分に関わり、否定的な感情も表出できる環境を整え、肯定的感情へと変化させることによって、学生の親準備性の涵養につながると考える。

## V. 結論

1. 乳幼児への好意感情に関する項目の合計点は、実習前より実習後の方が高かった。
2. 育児への積極性に関する項目の合計点は、実習前より実習後の方が高かった。
3. 育児への自信に関する項目の合計点は、実習前より実習後の方が高かった。
4. 親になるイメージに関する項目の合計点は、実習前より実習後の方が高かった。
5. 母性看護学実習は、学生の親になる準備に対しても寄与していることが示唆された。

## VI. 研究の限界と課題

今回の研究では、「産むことができる性」に着目し、対象を女子学生のみとした。しかし、子育ては父親の協力が不可欠である。親準備性は男女に共通の資質であるため、男子学生の親準備性についても研究を深めると同時に母性看護学の修得だけでなく、親準備性の形成にも寄与できるような実習指導を工夫していきたい。

## 謝辞

本研究をまとめるにあたり、学生の実習にご協力いただきました実習施設の皆様、対象者の皆様に感謝いたします。そして、本研究にご協力いただきました学生に感謝いたします。

## 付記

本研究は、第56回日本母性衛生学会の報告内容を加筆修正したものである。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省編：厚生労働白書平成26年版健康長寿社会の実現に向けて―健康・予防元年、261、厚生労働省、東京、2014。
- 2) 厚生労働省（2015）、次世代育成支援対策「行動計画策定指針平成26年11月28日」、2015年10月15日、[http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/H261128kou doukeikakusakuteisisin\\_3.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/H261128kou doukeikakusakuteisisin_3.pdf)
- 3) 大日向雅美：赤ちゃんふれあい体験学習の効果 5. 母性・父性の涵養、小児保健研究、59（2）、172-174、2000。
- 4) 小長井春雄：「ヤング・ペアレントフッド」事業の全国調査結果から母子保健を考える、生活教育、42（8）、24-27、1998。
- 5) 長宗雅美、寺嶋吉保、小野香代子、他：現代GP「医療系学生の保育所実習による子育て支援」乳幼児との継続交流による体験型コミュニケーション授業実施報告と終了時の評価、大学教育研究ジャーナル、5、105-115、2008。
- 6) 小野美奈子、松本憲子、川原瑞代、他：育児支援ボランティアを組織し活動した看護学生の成長過程、宮崎県立看護大学研究紀要、4（1）、8-19、2004。
- 7) 石川清美：赤ちゃんふれあい体験学習の効果―アンケート調査からみた効果―、小児保健研究、59（2）、159-165、2000。
- 8) 佐々木綾子、小坂浩隆、末原紀美代、他：親性育成のための基礎研究（2）―青年期男女における乳幼児との継続接触体験の心理・生理・脳科学的指標による男女差の評価―、母性衛生51（2）、406-415、2010。
- 9) 寺村ゆかの、川谷和子、伊藤篤：地域連携にもとづく次世代育成プロジェクト「赤ちゃんふれあい体験学習」の短期的効果に関する研究、保健の科学、49（1）、71-77、2007。
- 10) 大橋幸美、浅野みどり：親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討―親性の概念明確化に向けて―、家族看護学研究、15（1）、56-64、2009。
- 11) 岡本祐子、古賀真紀子：青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関連する要因の分析、広島大学心理学研究、4、159-172、2004。
- 12) 久保田まり、渡辺恵子：心理的親準備性から親性への移行に関する発達の研究、昭和大学教養部紀要、30、21-33、1999。

- 13) 滝山桂子, 斎藤一枝: 中学生・高校生・大学生の親準備性の実状: 秋田県における調査から, 秋田大学教育学部研究紀要: 教育科学部門, 52, 39-46, 1997.
- 14) 久世敏雄編: 現代青年の心理と病理, 98, 福村出版, 東京, 1995.
- 15) 伊藤千恵, 松井幸子, 大野絢子, 他: 男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察, 群馬パース大学紀要, 6, 81-89, 2008.
- 16) 徳田真理子, 甲斐寿美子: 母性看護学実習後における学生の意識の変化, 帝京平成看護短期大学紀要, 17, 21-25, 2007.
- 17) 和田佳子, 大久保明子: 母性および小児看護学実習における看護学生の対児感情の変化, 新潟県立看護短期大学紀要, 8, 11-16, 2002.
- 18) 萩山優子: 母性看護学実習で分娩に立ち会った看護学生の性差による認知の特徴についての分析, 母性看護, 41, 43-45, 2010.
- 19) 佐々木綾子: 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討, 福井大学医学部研究雑誌, 8 (1・2), 41-50, 2007.
- 20) 堀洋道, 山本真理子, 松井豊編: 心理尺度ファイル人間と社会を測る, 380-383, 垣内出版, 東京, 1994.
- 21) 川瀬隆千: 学生保育サポーター事業のプログラム評価, 宮崎公立大学人文学部紀要, 16 (1), 45-62, 2008.
- 22) 川瀬隆千: 大学生の親準備性に関する研究, 宮崎公立大学人文学部紀要, 17 (1), 29-40, 2009.
- 23) 若井和子, 道廣睦子: 母性看護学に対する看護学生の苦手意識の構造, インターナショナルNursing Care Research, 9 (4), 127-133, 2010.
- 24) 太田操: ウェルネス看護診断にもとづく母性看護過程 (第2版), 18-25, 医歯薬出版, 東京, 2013.
- 25) 伊藤葉子: 中・高生の親性準備性の発達, 日本家政学会誌, 54 (10), 801-812, 2003.
- 26) 中西雪夫, 牧野カツコ: 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育 (第3報), 日本家庭科教育学会誌, 32 (2), 61-65, 1989.
- 27) 二宮克美, 大野木裕明, 宮沢秀次: ガイドライン生涯発達心理学 (第2版), 109-122, ナカニシヤ出版, 京都, 2012.
- 28) 佐々木綾子, 末原紀美代, 町浦美智子: 青年期男女の親性を育てる乳幼児との継続接触体験の内容分析による評価 (第1報), 思春期学, 27 (3), 270-282, 2009.
- 29) 深谷昌志編: 育児不安の国際比較, 36, 学文社, 東京, 2008.